きっと
どこかに
キラリと
光るものを
いただいています

東井　義雄

『2024年難波別院カレンダー』5月のことば

掲示板のことば

我が家では猫を二匹飼っていました。ある日、そのうちの一匹が病気になり病院へ連れて行きましたが、良くなることはなく、亡くなりました。また、その日から約一年が経った頃の事でした。いつも側にいるもう一匹の猫が見当たりませんでした。探しに行くと、寝床で眠るように息を引き取っていたのです。その日の朝まで元気にご飯を食べていたのに、その猫は何の前触れもなく亡くなってしまいました。

二匹の猫が居なくなった家の中、ふとした瞬間に猫たちが居た痕跡が目に留まります。ご飯を食べていた場所、オヤツを強請(ねだ)っていた場所、お気に入りだった毛布。それらを見る度に、沢山の笑顔や穏やかな気持ちを貰っていた事に気付かされます。落ち込んだ時や、病気をしたときにはそっと寄り添ってくれていました。小さな猫たちから大きな優しさと思いやりの心を頂いていたのです。

生きている以上、病気も死も常に隣にあるものです。しかし忙(せわ)しく過ごす日常の中では、それらを忘れている事がほとんどだと思います。それでも、いつ失われるか分からない命である事を時々思い出すことは、とても大事だと思うのです。

居なくなってしまった猫達に教えもらった「大切なもの」を見失わないよう、今を大切に生きたいと思います。

（大阪教区教化センター）

今月のことば

安楽国をねがうひと
正定聚にこそ住すなれ
邪定不定聚くにになし
諸仏讃嘆したまえり

浄土真宗の信仰に篤い能登地方ですから、学校に通う頃から食前には必ずお内仏に手を合わせる生活をしてこられたそうです。習慣となった行いを特別に意識することは無かったそうです。お内仏での「お勤め」も習慣として行ってきたそうです。しかし、今回の震災で、自分の死を覚悟した時、初めて「往生」という事を考えるようになったと話してくれました。私よりもよっぽど僧侶らしい事を仰るなぁと思うのと同時に、自身のお念仏に対する気持ちを見透かされているようでヒヤヒヤしながら聞いていました。

今年、能登の震災で、上司と連絡が取れない日が続いていました。毎年上司のご家族は能登半島のご実家で年末年始を過ごされています。電話がようやく繋がり、今は近所の方々と避難所で過ごしているとのことでした。電波が悪く、少しの時間しか話せませんでしたが、「まぁぼちぼちやっていくわ」と。人柄によるところも大きいのですが、前向きに生きようという雰囲気が伝わってきたのが印象的でした。

今月のご和讃にも「往生」の問題が説かれているように思われます。ご和讃にあります「正定聚」とは、絶対他力の信心を得て、阿弥陀仏の浄土へ往生することが定まっている人々のことを意味します。一方、「邪定不定聚」とは、他力本願（阿弥陀仏から信心を頂くこと）によってではなく、自分の力を信じて、善行を積むことや自分の努力によって浄土へ往生を果たそうとする人々のことを意味します。

浄土真宗における信心とは、絶対他力の信心であります。それを安楽国（阿弥陀の浄土）に住する諸仏が讃嘆する様子がこの和讃から感じられます。大切なのは自力作善の念仏ではなく、「既に阿弥陀仏の救済の中に私が存在している」という本願他力のお念仏が私に届いているという事です。そのことに対し「ありがとうございます」と自然に頭が下がる仏徳讃嘆のお念仏なのです。

しかし、私達は阿弥陀仏の本願を信じ切ることが出来ない凡夫です。ひょっこり「自力」が顔を出す。阿弥陀仏が既に「お前を救う」と仰せなのだから、それにお任せすればいい。そうは思っていても、やはり自身の力を信じ、優先してしまう私の有り様を、被災された上司の言葉から教えられたような気がします。（長谷　正利）

今月のことば出典『浄土和讃』
『真宗聖典』　４８０頁
『増補　真宗大谷派　勤行集』（青本）１１４頁

〈知ってる？ 仏事のあれこれ〉

「永代経」ってなぁに？

～私のお寺の永代経～

奈良県 正行寺 當麻 秀圓

私のお寺では、本堂左余間に「永代祠堂経」と中央に墨書された一回り大きな軸が奉安されています。報恩講の折には、四幅のご影が掛かりますので外しますが、それ以外は年中掛っています。

今の軸は、近年新しく新調したもので、永代経志のご懇念を賜った折に願主の名前と法名を記録しています。記載されてあるご門徒宅へは、お祥月に案内し、定例のお座のかたちでお勤めし、前住職が法話をしています。近頃は、顔見知りの方ばかりでマンネリ化し、「聞法」という真宗門徒本来の姿勢が薄らぎがちです。永代経法要は報恩講と並んで真宗寺院にとっては年中行事として、法義相続の大切な法会であります。

永代経のお志は「法義相続」仏法が永代に渡って伝わる為の原資であると聞かされ今日に至っています。賜った懇志金は平常会計とは別に永代経基金として積み立てられ、諸殿の修復や維持管理の費用として生かされます。

今後は、「永代経」の願いや、「ご懇志」がどのように生かされているのか、明確化し公表することが大切だと役員会や諸会議でも語られています。

拙寺の永代経法要は、春・秋二回、それぞれ日中と逮夜で勤めています。最近は夜分のお勤めは無くなっています。講師を招聘してご法話を頂いていますが、聞法中心の法要の姿勢を取り戻したいと願っています。

秋は彼岸中に、春は四月二十三日の「嶽参り」という在所の行事に合わせて勤めています。「嶽参り」とは、大阪府と奈良県との県境に二上山があり、その東側四キロのところに我が在所があります。三月の彼岸頃から八月のお盆過ぎまで夕陽が丁度、雄嶽と雌嶽の中ほどに沈むのです。その雄嶽と雌嶽の中間に太陽が沈む夕陽の景色が、有名な「弥陀来迎図」の景観となったと伝えられています。その光景を拝むことを「嶽参り」と称しています。

夕陽が沈む時、二上山の影が東側一理四方（四キロ）に及びます。その影に覆われる地域に「嶽参り」の習慣がありましたが今は殆ど無くなってしまいました。

太陽に照らされている山の景観は筆舌に尽くし難いものです。在所に伝わる行事と共に、永代経の大切な願いを相続していきたいものです。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈226〉

ブラフマダッタ王としゃべりすぎな僧